とらうべ

新世紀への架け橋

原田勝広
日本経済新聞社 編集委員

21世紀が近い．経済は相変わらずの迷走ぶりだし，地域や家族の崩壊が日本の未来に暗い影を落としている．本当に日本はどうなるのだろうと不安になってしまう．しかし，暗い話ばかりではない．一方で，何か新しいわくわくするような動きがあることもまた確かなのである．

一言でいえば私たちはいま市民社会のとば口に立っている．情報技術の飛躍的な進歩で，国境の垣根が低くなり，非国家アクターのひとつとして注目されているNGO(非政府組織)の存在感がますます大きくなっている．NGOというとわかりにくいが，簡単にいえばボランティアの人たちだ．

私がそんなNGOの若者たちを知ったのはひょんなことからだった．最近日本のNGOもコソボや東ティモールでがんばっていると国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)で耳にしたのだ．取材してみると，みな若くてさわやかな若者たちだ．紛争地の難民を支援するプロで，政府や企業の協力を得て緊急人道支援のためのシステム「ジャパン・プラットフォーム」を作りたいという．

興味深い話だと思った私は早速，夕刊のコラムでこのアイデアを紹介した．正直なところ，いいアイデアだが実現は大変だろうなと思っていた．そんな思惑はすぐ吹き飛んだ．若い読者らの共感の声が相次いだ．時代が求めているものが理解できるような気がした．反政府，反企業というイデオロギー的な発想ではなく，市民として皆で横に手をつなぐという発想が組織を超えて受け入れられつつあるのだ．そして本当に時代が変わりつつあることを実感できる1本の電話がかかってきた．

その電話は大蔵省の主計官からのものだった．外務省の予算を一手に引き受けているその若い主計官は「原田さんの記事を読みました．NGOのアイデアはすばらしいから，みなで力を合わせて実現しませんか」という．

それからは21世紀に向けて虹の橋を架けるような楽しい作業だった．多くのNGOと外務省．それだけでなく，企業や財団から若手が集まり，どうプラットフォームを作りあげていくか和気藹々ながらも真剣な議論が繰り返された．NGO同士でさえそれまではいがみ合い，足の引っ張り合いでろくに情報交換もしていなかった．ましてや，政府とNGOはコミュニケーションはゼロに等しかった．しかし，誰もが本当は夢のある話に飢えていたのだ．

そして半年であっというまにプラットフォームが立ち上がった．市民社会の原型がそこにあった．「こんな閉塞感に覆われた日本でもやればできるんだなあ」というのが参加者全員の素直な実感である．

詳しい経緯は9～11月に「日経新聞」の夕刊に長期連載した「NGO駆ける」に書いたが，NGOの持つ「志」と「優しさ」が時代を変えつつある．しかし，それは考えてみれば，日本人がずっと持ち続け，いつのまにかなくしたものだ．そしていま一番，人々が探し求めているものではないだろうか．

© IGAKU-SHOIN Ltd, 2013
2026/09/23 13:27:58